

沖縄クレオロイドの研究をめぐって

狩俣, 繁久

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

43

(開始ページ / Start Page)

85

(終了ページ / End Page)

96

(発行年 / Year)

2019-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022998>

沖縄クレオロイドの研究をめぐって

狩 俣 繁 久

1. 琉球列島における言語接触

琉球語は、日琉祖語を保持した人々の琉球列島への移動によって成立したが、日琉祖語から袂を分かったのち、琉球語が孤立して現在に至っているわけではない。琉球と日本の間には分岐後も絶え間ない人の移動があり、琉球語は言語的にも影響を受けてきた。

琉球国期に人の移動とそれに伴う言語接触はあったが、それは琉球語の言語体系に大きな改変を生じさせるようなものではなかった。琉球国が日本に併合された1879年の近代化以降の大規模かつ長期にわたる言語接触は、琉球語の変容と琉球語の日本語への置換という深刻な事態を招いている。

近代以降の琉球語は、明治政府による琉球国の併合、第二次大戦後の米軍による沖縄統治、日本への施政権返還＝日本復帰の三つの事件に遭遇する。その中でも明治政府による琉球国併合は、琉球語の運命を決定する最も大きな事件であった。

中央集権国家の日本国への併合によって人々の移動が自由になり、日本から多くの人が移り住み、沖縄からも日本に移住した。琉球列島内の移動も自由になった。いろいろな地域の人々が混住すると、リングフランカとしての共通の言語が必要になった。言語差の大きな琉球語の中で琉球国の王都の首里の方言は共通語としての役割を果たす十分な能力がなかった。琉球語は話し言葉としてしか機能しなかったが、日本語は書き言葉も持っていて教育言語としても機能したので、日本語を使用せざるをえなかった。はじめは限られた場所での接触だったが、あらゆる場所や時間に多くの人が接触するようになって、いまや琉球語を第一言語にする母語話者は激減し、日本語モノリンガルの話者が大半を占める状況になっている。

近代以降の日本語との言語接触は、(1)接触言語の発生、(2)琉球語の変容、(3)琉球語の消滅危機の三つを起こしている。本稿では琉球語と日本語の言語接触によって発生した接触言語に関して最近発表された座安浩史(2016)と葦原恭子(2016)の二つの研究に焦点をあて、接触言語研究の今後を考える。

2. 琉球クレオロイド

琉球語の母語話者が日本語を獲得する過程で不完全な習得がおこなわれ、目標言語である日本語に第一言語の琉球語の言語的特徴が持ち込まれて琉球語とも日本語とも異なる、第3の言語変種が生まれた。

ロング(2009)、およびロング(2010)は、当該言語変種が接触言語だが、多くのクレオー

ルと異なり、系統を同じくする言語が接触して生まれていて、クレオール conditions を満たしていないこと、クレオールの変種の準クレオール（以下クレオロイド）に全体としては近い性格を有するが、それまで認められた三つのタイプのクレオロイドのいずれにも完全には一致しないことを指摘した。かりまた（2010）は、琉球語と日本語の接触言語を琉球クレオロイド日本語（以下、琉球クレオロイド）とあえて名づけた。本稿でもその用語を用いる。琉球語の下位言語である奄美語、沖縄語、宮古語、八重山語のそれぞれの要素の持ち込まれた奄美クレオロイド、沖縄クレオロイド、宮古クレオロイド、八重山クレオロイドがある。琉球クレオロイドはそれらの総称である。

沖縄クレオロイドに対する民間の俗称として「ウチナーヤマトウグチ」があり、奄美クレオロイドには「トン普通語」があるが、宮古クレオロイドや八重山クレオロイドなどに対応する俗称もなければ、総称としての琉球クレオロイドに対応する俗称もなかった。

3. クレオロイド琉球語

多くの琉球語母語話者は、琉球クレオロイドとのバイリンガルである。そして、彼らは、日本語を琉球語にたやすく翻訳できる。もともと琉球語に存在しない表現があるとき、形式的に直訳してしまうことも少なくない。伝統的な琉球語としては変なのだが、日本語が堪能な話者や琉球クレオロイドを第一言語にする話者はそのことに気づかない。屋比久浩（1987）は、この接触言語をヤマトウチナーグチと呼んだ。

沖縄語ではデークニ（大根）もイユ（魚）もメー（飯）もニーン（煮る）という。しかし、60代以下の話者の中に「メー タチュン（飯を炊く）」という人がでてきた。この現象は、カチュン（書く）、イチュン（行く）等、日本語のカ行動詞との間にある規則的な対応の知識を過剰に適用した造語である。伝統的な琉球語には第三者の受け身文は無かったが、琉球クレオロイドのバイリンガルは、自動詞文の述語を受け身動詞にした第三者の受け身文を作ってしまう。類似の例は枚挙にいとまがない。そして、今後ますます増えてくることが予想される。

これらは、日本語モノリンガルの若い人が琉球語を獲得していく過程で目標言語である琉球語に第一言語の日本語が影響したもので、形式的には琉球語だが、中身は日本語である。若い人の使う琉球語は、日本語クレオロイド琉球語（以下、クレオロイド琉球語）とでもいうべき第4の言語変種とみることができる。クレオロイド琉球語にも下位の言語変種としてクレオロイド奄美語、クレオロイド沖縄語、クレオロイド宮古語、クレオロイド八重山語を想定しなければならない。

琉球語と日本語の接触言語には、琉球クレオロイドとクレオロイド琉球語がある。琉球クレオロイドは、目標言語が日本語であること、その音韻体系、文法体系、とくに、動詞、形容詞の形態論的な特徴などの点からみたとき、日本語の変種として分類されよう。クレ

オロイド琉球語は、目標言語が琉球語であること、その言語学的（とくに形態論的）な特徴からみて、琉球語の変種として分類されよう。

4. 先行研究における琉球クレオロイドの定義

琉球クレオロイドの研究は、伝統的琉球語に関する研究に比べると、圧倒的に数は少ないが、沖縄クレオロイドに関するものが継続的になされてきている。

最も早い時期に沖縄クレオロイドについて言及した桑江良行（1930）は、研究対象を明確に名付けていないが、これを誤った日本語（「誤謬」）としている。獲得の目標言語が日本語であったとみていたことを考慮すると、桑江良行（1930）がこの言語変種を沖縄クレオロイドとみていたと考えることができる。

本永守靖（1994）は、「沖縄では、共通語化の過程で、方言的ななまりをもった共通語が発生した。これを地元では「ウチナーヤマトウグチ」（沖縄大和口）と呼んでいる」と述べたうえで、この言語変種が言語接触によって生まれたものであり、「全国共通語（標準語）」とは異なる「地域共通語」であるとしている。本永守靖（1994）自身が「地域共通語」をどのような性格の言語として捉えていたのか詳しい言及はない。しかし、本永守靖（1994）は、「共通語化の過程で、方言的なまりをもった共通語が生まれている」とも述べており、日本語の変種＝沖縄クレオロイドと考えていたと考えることができる。

屋比久浩（1987）は、この言語変種を「伝統的な琉球方言と共通語の接触によって生まれた言語である」と定義している。高江洲頼子（2002）は、「話者は標準語をはなそうと志向しているが、方言が基盤にあって、その干渉をうけてあらわれる言語現象」と定義している。屋比久浩（1987）の「言語」、高江洲頼子（2002）の「言語現象」がどのようなものか、屋比久浩（1987）も高江洲頼子（2002）も具体的な言及はしていないが、いずれも、日本語を目標言語として獲得しようとする過程で生まれた言語変種であるとみているので、この接触言語を沖縄クレオロイドとみていると考えることができる。

中本正智（1990）は、伝統的な琉球方言を「旧来方言」とよび、この言語変種を「改新方言」と呼んで区別している。中本正智（1990）の「改新方言」は「形態は共通語だが、意味の面では「旧来方言」を継承し、「一見、標準語らしくみえ、またこれをつかう個人もそのつもり」でいて、「語や文法的言いまわしが東京語に近いというだけのことで、ある部分は、やはり旧来方言のものを引き継いでいる」としている。中本正智（1990）は、「改新方言」を「一見、標準語らしくみえ、また、これを使っている個人もそのつもりでいる」と述べていて、目標言語が日本語であるとみていると考えることができる。中本正智（1990）のいう改新方言も沖縄クレオロイドと考えることができる。

5. 座安浩史 (2016) の定義

座安浩史『ウチナーヤマトウグチの研究』(森話社、2016)は、463頁におよぶ著書である。座安浩史(2016)は、豊見城市上田の伝統方言および上田で話されている接触言語と、石垣市石垣方言および石垣で話されている接触言語について論じている。座安浩史(2016)の当該接触言語についての定義は、先行研究の見方と大きく異なる。

座安浩史(2016)は、「本書では高江洲(2002)の定義に則って豊見城市上田方言および石垣市方言を蒐集し、分析考察を行う」としているが、高江洲頼子(2002)は「話者は標準語を話そうと志向しているが、方言が基盤にあって、その干渉をうけてあられる言語現象」と定義しているだけで、どのような言語変種なのか接触言語論の観点から必ずしも明確には定義しているわけではない。もしそうであるなら、座安浩史(2016)も明確に定義していないことになる。

そこで、座安浩史(2016)が当該の接触言語をどのように捉えているか具体的な記述からみしてみる。

ウチナーヤマトウグチとは伝統的な琉球方言と共通語との接触によって生まれた、中間的な言語であり、その誕生は比較的新しい。p. 12。(下線は狩俣。以下同じ。)

ウチナーヤマトウグチは伝統的な琉球方言と共通語の接触によって生まれたことばであり、その存在は言語接触に関する研究だけでなく、ピジンやクレオール研究にも貢献できる。p. 416。

先行研究と同じく、座安浩史(2016)もこの言語変種を接触言語としての性格をもった言語であることを認めている。そのいっぽうで、以下に示すように接触言語を琉球語の新しい形態であると捉えている。

本書が、琉球方言の共時態であるウチナーヤマトウグチ研究の一端となれば幸いである。p. 5

ウチナーヤマトウグチが、新たな琉球方言の一つとして琉球方言圏に継承されていることを考えると、琉球方言圏各地の実態を捉え、観察された用法を分析することで、ウチナーヤマトウグチの定義を確立させることも急務である。p. 416

琉球方言が衰退していくなかで琉球方言の共時態がウチナーヤマトウグチである。p. 415

琉球方言の痕跡を残したウチナーヤマトウグチが、新たな琉球方言とみなされていく可能性を考えれば、ウチナーヤマトウグチの資料を蒐集し、分析、考察することは必要不可欠であろう。p. 462

座安浩史（2016）は、豊見城市上田出身の若年層の「ウチナーヤマトゥグチ」の記述、石垣市の若年層の「ウチナーヤマトゥグチ」の記述に際して、その用例をあげるときも「上田方言」、「石垣方言」としている。そこには「ウチナーヤマトゥグチ」を「琉球方言の共時態」と捉える座安浩史（2016）の考え方が端的にあらわれており、座安浩史（2016）が当該接触言語を琉球語の下位の変種と位置づけていることが分かる。座安浩史（2016）の考え方を筆者なりにまとめると、つぎのようになる。

琉球方言と共通語が接触する中で生まれた新たな琉球方言の言語変種で、琉球方言の共時態の一つ。

座安浩史（2016）は、「高江洲（2002）の定義に則って」当該言語を接触言語であると認めたにもかかわらず、高江洲頼子（2002）とは異なる見方をしている。座安浩史（2016）が当該接触言語を琉球方言の共時態の一つとみなすということは、先行研究が「話者は標準語を話そうと志向」しているが、「形態は共通語」で、「方言的ななまりをもった」「誤った日本語」と性格づけたのと異なる独自のものである。琉球語と日本語の接触言語で、琉球語の変種とみるなら、その接触言語は、上に述べた第四の接触言語のクレオロイド琉球語とみていることになるのではないだろうか。

しかし、座安浩史（2016）が上田方言、石垣市方言として挙げている例は、その動詞や形容詞の形態論的な特徴から見て沖縄語や八重山語石垣市方言の特徴が全く見られない。格助詞のなかに沖縄語、八重山語石垣市方言の格助詞の文法的な意味を受け継いだものがあるが、他の格助詞を含む格体系をみると、その音声形式を含め日本語の変種である。座安浩史（2016）は、当該接触言語を琉球語の下位の変種とみる根拠を全く示さないまま、「琉球方言の共時態の一つ」と認定している。

座安浩史（2016）の上田方言の若年層の音韻の項に掲載された語例も圧倒的な日本語の語形のなかに、沖縄語由来の語形が混じっている。これは日本語の中に漢語や外来語が混じるのと同じものであり、それらの単語の存在することを理由にして、日本語を中国語や英語の変種にしないのと同じく、沖縄語由来の単語の混在を理由にこの言語変種を琉球語とみることはできない。

上田方言若年層話者の方言の助詞の記述に採用された用例をみると、一部の単語と助詞等の文法形式に日本語とは異なる意味が見られるものの、それ以外の助詞にも動詞、形容詞の形態論的な形式にも沖縄語的な特徴はみられない。座安浩史（2016）が分析の対象としてあげた語例や例文は日本語の下位の変種にしか見えない。これを琉球方言の下位の変種とみる根拠も示されていない。したがって、座安浩史（2016）がとりあげた「ウチナーヤマトゥグチ」をクレオロイド琉球語とみることはできない。

座安浩史 (2016) がウチナーヤマトゥグチを「新たな琉球方言の一つ」とした性格づけと分析対象の語例や文例とのあいだには大きな矛盾がある。

6. 八重山クレオロイドはウチナーヤマトゥグチか

座安浩史 (2016) が書名にも使用している「ウチナーヤマトゥグチ」は、日本語と沖縄語が接触する過程で生まれた接触言語の沖縄地方での言語変種の一般の俗称である。かりまた (2010) は、琉球列島で使用される接触言語の総称として「ウチナーヤマトゥグチ」を使用することを次のように批判した。

奄美諸島（とくに奄美大島）で発生した言語変種は「トン普通語」とよばれ、沖縄諸島で発生した言語変種は「ウチナーヤマトゥグチ」とよばれる。宮古諸島、八重山諸島で発生した言語変種にはきまった名称がない。これらの言語変種を「ウチナーヤマトゥグチ」と総称する研究者もいるが、「ウチナー」が沖縄島（ときにその周辺離島をふくめる）しかさしめさないので、琉球列島各地の言語変種をウチナーヤマトゥグチとよぶのは、琉球諸方言を沖縄方言（ウチナーグチ）と総称するのに似て奇妙であるし、沖縄島に住むマジョリティの周辺マイノリティに対する配慮の欠如が感じられて承認できない。

座安浩史 (2016) が沖縄クレオロイドに比べて研究の少なかった八重山クレオロイドをとりあげたことは評価できる。しかし、八重山クレオロイドをウチナーヤマトゥグチと呼ぶことは、八重山語と八重山クレオロイド、あるいは宮古語と宮古クレオロイドを沖縄語と沖縄クレオロイドを対等の言語と見ず、八重山クレオロイドが沖縄クレオロイドの中に含まれることになる。

八重山地域にも宮古地域にも沖縄本島からの移住者が増加するとともに、マスコミなど様々な影響によって、八重山語、宮古語、および、八重山クレオロイド、宮古クレオロイドに対する沖縄語および沖縄クレオロイドの影響が増している。そのような現実に鑑みると、座安浩史 (2016) の考えはこれらの現実を覆い隠す可能性があり、かりまた (2010) で述べたようにこれを認めることはできない。

接触言語の音韻記述は、基層語の音素が琉球クレオロイドのなかにどのように現れるかだけでなく、基層語の音声的な特徴や癖がどのように現れるかの観察や記述も重要である。喉頭化音を有する奄美語を基層語にもつ奄美クレオロイドの外来語には喉頭音化した子音のアロフォンが現れることをかりまた (2006) が指摘したが、同じことが今帰仁村在住の小学生の沖縄クレオロイドにも観察できる。

伝統的な石垣方言には、舌先母音¹があるし、強い呼気を伴って発せられる無声子音や、無声子音に挟まれた広母音や半広母音が無声化する特徴がある。これらの石垣方言の音声的な特徴が若年層のそれにどのように現れるのか興味は尽きない。しかし、残念ながらそのような記述がない。石垣の若年層の八重山クレオロイドの音韻の記述が全く見られないのである。

7. 葦原恭子 (2016) の定義

葦原恭子 (2016) は、沖縄クレオロイドの「だからよ。」を分析している。しかし、研究対象の接触言語について「沖縄共通語」および「地域共通語」という用語を使用しているが、接触言語論の観点から、それらがどんな性格の言語なのか明確な定義を行っていない。すなわち、沖縄共通語と地域共通語が方言なのか方言ではないのか。方言だとするならば、沖縄語の変種なのか日本語の変種なのかあいまいである。方言でないとするならば、それはどんな音韻体系や文法体系や語彙体系をもった言語変種なのかあいまいであり、それが体系性をもった言語なのかいかなる性格づけも行なわれていない。そもそもそれが接触言語の変種なのかさえ明確には述べられていない。

いっぽう、葦原恭子 (2016) は、「地域共通語」について「「ある特定の地域で共通する」という特徴をもったことば」と定義しているが、それが沖縄という地域で共通語的に使用されている沖縄中央方言をさしているのか²、リングフランカとして使用されている沖縄クレオロイドをさしているのか不明である。

近年、沖縄クレオロイドの文法研究が少しずつ見られるようになってきたが、日本語には存在しない形式や意味だけを対象にした俚諺的な研究が多い。そんな状況の中で、「「ある特定の地域で共通する」という特徴をもったことば」のように「ことば」という用語を使用している。1個の単語を指すことも、特定の表現を指すことも、「沖縄のことば」のようにある言語体系を指すことも可能な「ことば」というあいまいな用語は学術用語としてはなじまない。

葦原恭子 (2016) が日本語に見られない文法形式の「だからよ。」の俚諺的表現の研究を意図しているのか、「だからよ。」という文の分析を通して当該接触言語のモダリティの解明のための研究を意図しているのか明確ではない³。葦原恭子 (2016) が対象言語を接触

¹ 宮城信勇 (1999) 等に石垣方言の舌先的な音色を伴う半狭母音の*e*に関する記述があるが、座安浩史 (2016) では触れられていない。

² 沖縄本島中南部地域で話されている「ウチナーグチ」と俗称される言語は、首里方言や那覇方言を基礎にしながら、伝統的な地域語である首里方言でも那覇方言でもない、中央沖縄方言とでもよぶべきものである。この中央沖縄方言は、部分的ではあるが沖縄県内において一定の影響力をもちた共通語的な役割を担っている。

³ 葦原恭子 (2016) の記述からは前者のもののように思われる。

言語として明確に定義していないことが分析方法や分析結果に現れている。それについては後述する。

8. 沖縄クレオロイドの研究方法

沖縄クレオロイドには、沖縄語の言語形式が形を変えて持ち込まれ、目標言語の日本語には見られない言語形式が存在する。また、形式的には日本語のように見えても沖縄語の意味が持ち込まれ、日本語には存在しない意味を有する形式が存在する。それは語彙にも文法にも見られる。接触言語を研究対象にした研究であれば、目標言語に基層言語の言語的な特徴がどのように持ち込まれたかを記述することは大きな意義がある。

沖縄クレオロイドは、沖縄語とも日本語とも異なる独自の体系をもった言語である。沖縄クレオロイドが沖縄語と日本語の接触によって生まれたものであるとするなら、基層語の沖縄語の何が持ち込まれたのか、それは変容せずに持ち込まれているのか、何らかの変容が見られるのかを明らかにすることが重要である。そのためには、沖縄語および日本語の研究の知見を生かすことが求められる。

近年、沖縄クレオロイドの文法研究が少しずつ見られるようになってきたが、日本語には存在しない形式や意味だけを対象にした俚諺的な研究が少なくないなか、高江洲頼子(1994)は、概略的ではあるが、沖縄クレオロイドの形態論に関する体系的なアプローチを行なった研究である。高江洲頼子(2004)は、工藤真由美・他(2006)の首里方言のAspect・Tense・Modality体系の研究成果に大きく学びながら、それを土台にした沖縄クレオロイドのAspect・Tense・Modality体系の研究であり、沖縄クレオロイドの文法研究の現段階での一つの到達点であり、研究のモデルとなるものである。高江洲頼子(1994)と高江洲頼子(2004)は、沖縄クレオロイドを体系としての一つ言語として扱うべきものであること、沖縄クレオロイドが日本語と沖縄語の接触言語であることを前提にするなら、目標言語である日本語および影響を与える沖縄語についての十分な知見が必要であることを示唆している。

9. 沖縄クレオロイド「だからよ。」の分析

沖縄クレオロイドの文法形式として「～しましょうね。」「だーる、だーる(そうだ、そうだ)」「いーはずよ(いいなあ)。」「じらー(なんちゃって)。」等とともに、次のように使われる「だからよ。」がある。

話し手A：あんだ、最近太ったんじゃないの。

話し手B：だからよ。

葦原恭子（2016）は、「だからよ。」に含まれる「だから」に着目し、「だからよ。」を「接続表現」の一つとしてとらえた分析を行なっている。そこでは先行する文（甲）と後続する文（乙）の間に置かれて、両者を繋ぐ接続詞「～(甲)～。だから、(乙)だ。」のような標準語の接続詞に関する先行研究の森田良行（1985）、谷崎和代（1994）、加藤薫（1995）、佐久間まゆみ（1992）、佐久間まゆみ（2000）を引用し言及している。そして、「だからよ。」「だからさ。」「だからさあ。」に次のような九つの談話展開機能を取りだしている。

- 「ソシテ、サラニ、マタハ」に置き換えられる話を重ねる機能（p. 81）
- 「ソレデハ、デハ、ジャア」に置き換えられる話を終える機能（p. 82）
- 「要スルニ、シタガッテ、ユエニ」に置き換えられる話をまとめる機能（p. 84）
- 「ソコデ、ケレドモ、ガ、ムシロ」に置き換えられる話を進める機能（p. 85）
- 「例エバ、スナワチ、ナゼナラ」に置き換えられる話を深める機能（p. 85）
- 「トコロデ、ジャ、シカシ、実ハ」に置き換えられる話を変える機能（p. 86）
- 「ソレカラ、ソレデ、デ、ダカラ」話をうながす機能（p. 86）
- 「デモ、ダケド、シカシ、ダッテ」に置き換えられる話をさえぎる機能（p. 86）
- 「ダケド、デモ、タダ」に置き換えられる話をはさむ機能（p. 87）

いっぽう、比嘉清（2010）、吉田直人（2006）は、いずれも「だからよ。」には同意やあいづちの意味があり、談話を終了させる機能があることを述べている。葦原恭子（2016）の主張する談話展開機能と、比嘉清（2010）、吉田直人（2006）のいう談話終了機能との間には大きな開きがある。

接続詞「だから」を含む文は、先行する文（甲）の表す出来事の成立を前提にして、その出来事が原因・理由としてはたらき、後続する文（乙）の出来事が結果として発生すること／発生したことを表す。葦原恭子（2016）の「だからよ。」の「だから」を接続詞とみることができるなら、話し手Aの発した先行する文（甲）の発話内容を話し手Bが承認したうえで、後続する文（乙）で話し手Bの態度が表明されたものであるということになる。

しかし、沖縄クレオロイドの表現形式「だからよ。」には後続する文（乙）が欠けていて、接続詞に終助詞「よ」が直接後接した、接続詞だけで構成された文である。「だからよ。」が接続詞を含むものではあるとしても、「だからよ。」それ自身は完結した文である。語彙的な意味を持たず、先行の文に対する関係的な意味を表す接続詞「だから」に終助詞「よ」を後接させた「だからよ。」は、接続詞と終助詞だけから成る一語文である。

二つの文を繋ぐ接続詞の「だから」と、一語文の「だからよ。」は一線を画す、レベルの異なったものである。葦原恭子（2016）は、対象となる一語文「だからよ。」の「だから」だけを検討して、結論をだしている。

「だからよ。」には終助詞「よ」が後接している。したがってその分析には、終助詞「よ」の通達的な意味を明らかにすることが不可欠である。しかし、葦原恭子（2016）は、終助詞を検討していない。それだけでなく、「だからよ。」、「だからよー。」、「だからさー。」（1）（10）、「だからさ。」（2）、「だからねー。」（6）（15）、「だからよなー。」（16）、「だからよねー。」（17）など、形式の違う終助詞も母音の長短の違う終助詞も区別しないで分析して結論をだしている。終助詞は、イントネーションの違いや母音の長短の違いが話し手の通達的な意味と認識の違いを表しわける重要な表現形式であるが、その違いを無視して分析しているのである。

比嘉清（2010）は、「失敗や間違いと指摘された場合に、言い訳をする代わりに『だからよ』といえ、喧嘩に発展しそうな会話でも切り上げさせる力」があり、「『だからよ』には相手の指摘事項を認め、反省の意味が込めら」れているとしている。また、吉田直人（2006）は「相手への同意が本来の使い方」であり、「同意、ただの相づち、思考停止、拒否、会話停止」をその談話上の機能としている。

「だからよ。」の「だから」が先行する文（甲）との関係について表現しているとしても、後続する文は発話内容（出来事）が省略されていて、展開そのものが成り立たない。終助詞は、文末の述語に後接し、聞き手との関係のなかで対象的な内容に対する話し手の通達的な意味と認識のさまざまを表現する。終助詞には、発話内容に対する話し手と聞き手の情報共有の有無（既知・未知）、人称、聞き手目当て（聞き手への利益の配慮）の有無などが反映されて、聞き手への態度が表されている。終助詞「よ」を含む「だからよ。」も同様である。比嘉清（2010）の「切り上げさせる力」、吉田直人（2006）の「同意、ただの相づち、思考停止、拒否、会話停止」という分析は、「だからよ。」が一語文であることと終助詞の働きを捉えたものである。「だからよ。」の分析は、比嘉清（2010）、吉田直人（2006）の分析を承認したうえで、先行する話し手Aの発話に対して、話し手Bの「だからよ。」がどのような通達的な意味をもってなされたのかを具体的に明らかにしていくことが必要である。

「だからよ。」は、「だからさ。」、「だからさー。」、「だからね。」、「だからねー。」、「だからよね。」、「だからよな。」、「だからさーね。」など、終助詞を含む一語文のつくりだす小体系のなかにある。一語文という特殊な文を検討するまえに、「さ」「さー」「ね」「よね」「よな」「さーね」等の沖縄クレオロイドの終助詞のついた文のモダリティの解明が先にあり、その分析結果に基づきながら、終助詞の異なる当該の一語文のモダリティを検討し、それらの共通性と差異性を明らかにするなかで、話し手Aの発した文の内容、発話意図に対する話し手Bの通達的な態度を解明しなければならない。

「よ」「ね」が日本語の終助詞と似た音声形式であっても、そこに沖縄語の終助詞の意味や用法が持ち込まれているとするなら、沖縄語の終助詞の分析とそれとの比較、日本語の

終助詞との比較も行わなければならない。高江洲頼子（2004）が沖縄クレオロイドの аспекト研究で示したような体系的なアプローチが不可欠なのである。

伝統的琉球語の危機的な状況が進行するだけでなく、非母語話者の話す琉球語にクレオロイド琉球語的要素の増加も進行している。いっぽうで、琉球クレオロイドの脱クレオール化も進行していて、ある意味で琉球クレオロイドから琉球語的な要素の喪失は、琉球クレオロイドの危機的な状況が進行しているともいえる。

琉球方言研究クラブ（2018）は、宮古クレオロイドについての概括的な記述であるが、談話資料等の実例と面接調査などに基づいた、宮古クレオロイドの体系的な研究を目指したものである。今後このような宮古クレオロイドや八重山クレオロイドや奄美クレオロイドの研究がでてくることのぞまれる。

参考文献

- 葦原恭子（2016）「沖縄県の地域共通語「だからよ」の談話における機能」『*Southern Review*』No.31、pp. 75～90
- 加藤薫（1995）「“原因・理由”を受けない『だから』－『だから』の主體的側面の突出－」『早稲田日本語研究』31-3号
- かりまたしげひさ（2016）「沖縄名護市幸喜方言の終助詞とモダリティ」『琉球アジア文化論集』第2号、pp. 11～52
- かりまたしげひさ（2010）「琉球クレオロイドの性格」『コンタクトゾーンとしての島嶼共同体－言語、アイデンティティ、ジェンダー、環境－』、采流社、pp. 31～42
- かりまたしげひさ（2008）「トン普通語・ウチナーヤマトウグチはクレオールか－琉球・クレオール日本語研究のために－」『南島文化』30号、沖縄国際大学南島文化研究所紀要 pp. 56～65
- かりまたしげひさ（2006）「沖縄若者ことば事情－琉球・クレオール日本語試論」『日本語学』1月号、pp. 50～59
- かりまたしげひさ（1994）「沖縄における言語状況」『国文学 解釈と鑑賞』第59巻1号、至文堂
- 狩俣繁久（1992）「八重山方言」『言語学大辞典 第4巻』三省堂
- 工藤真由美・高江洲頼子・八亀裕美（2007a）「首里方言の аспекト・テンス・エヴィデンシャルティー」『大阪大学大学院文学研究科紀要』47
- 工藤真由美・仲間恵子・八亀裕美（2007a）「与論方言動詞の aspekト・テンス・エヴィデンシャルティー」『国語と国文学』84-3、東京大学国語国文学会
- 工藤真由美編（2004）『日本語の aspekト・テンス・ムード体系－標準語研究を超えて－』ひつじ書房

- 佐久間まゆみ (1992)「接続表現の文脈展開機能」『日本女子大学文学部紀要41』
- 佐久間まゆみ (2000)『複文と談話』第3章、岩波書店
- 座安浩史 (2016)『ウチナーヤマトゥグチの研究』森話社
- 高江洲頼子 (2004)「ウチナーヤマトゥグチー動詞のアスペクト・テンス・ムードー」『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系ー標準語研究を超えてー』
- 高江洲頼子 (2002)「ウチナーヤマトゥグチをめぐって」『国文学解釈と鑑賞』第67巻7号
至文堂
- 高江洲頼子 (1994)「ウチナーヤマトゥグチーその音声、文法、語彙についてー」『沖縄言語研究センター研究報告3那覇の方言I』沖縄言語研究センター
- ダニエル・ロング (2009)「第二言語習得論と言語接触論からみたウチナーヤマトゥグチ」
沖縄言語研究センター研究会発表原稿
- ダニエル・ロング (2010)「言語接触論から見た琉球ウチナーヤマトゥグチの分類」『人文
学報』第428号
- 谷崎和代 (1994)「談話標識についての考察ー『だから』を中心に」『大阪大学言語文化学』
第3号
- 中本正智 (1990)『日本列島言語史の研究』大修館書店
- 比嘉清 (2010)「比嘉清の沖縄語講座 文でおぼえるうちあぐち第13講良い天気だから、
海へ行きます」https://blogs.yahoo.co.jp/bunshou_uchinaaguchi/8366488.html
- 細川弘明 (1992)「ピジン・クレオール諸語」『言語学大辞典』第3巻 亀井孝他編 三省堂
- 森田良行 (1985)「文章分析の方法」『応用言語学講座I』明治書院
- 屋比久浩 (1987)「ウチナーヤマトゥグチとヤマトゥウチナーグチ」『国文学 解釈と鑑賞』
第52巻7号 至文堂
- 吉田直人 (2006)『金なし、コネなし、沖縄暮らし!』イカロス出版
- 琉球方言研究クラブ (2018)『琉大方言第32号ー宮古クレオロイド』琉球方言研究クラブ